



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3788 号 2017.7.23 発行

相模原殺傷 1 年 措置入院患者の支援進まず 増員 5 自治体

毎日新聞 2017 年 7 月 22 日

昨年 7 月に起きた相模原障害者施設殺傷事件を受け、国が今年度、全国の自治体に精神障害者の社会参画の支援などをする精神保健福祉士 200 人を増やせる予算措置をしたにもかかわらず、実際の増員は非常勤を含め 1 県 4 政令市の計 23 人とどまることが、毎日新聞の調査で分かった。国会審議中の精神保健福祉法改正案が施行されれば、自治体は措置入院患者への支援を強化しなければならないが、人員不足のままでは入院長期化など患者に不利益が生じる懸念もある。

殺人罪などで起訴された植松聖被告（27）は、事件前の昨年 2～3 月に精神疾患と診断され措置入院していた。だが、退院後は通院をやめ、相模原市の支援対象からも外れていたことが事件後に問題視された。

そこで国は、全措置入院患者に対し、関係機関が連携して退院後の支援計画を作る方針を決め、改正法案を提出。施行前に人員態勢を整えておく必要があるため、常勤専門職 200 人分の人件費に当たる 10 億円を地方交付税に上乗せして自治体に増員を促した。

しかし毎日新聞が 6～7 月、47 都道府県と 20 政令市に書面でアンケートしたところ、増員したのは、年度内予定や非常勤を含め岐阜県（6 人）▽千葉市（1 人）▽横浜市（5 人）▽川崎市（2 人）▽神戸市（9 人）――の 5 自治体のみだった。

愛知県、北九州市など 26 自治体は「来年度に増員予定」、大阪府、札幌市など 13 自治体は「増員予定はない」と回答。「必要人員がまだ分からない」などの理由で明言しなかった自治体も 23 あった。また、兵庫県は 2016 年度に 8 人、徳島県も 1 人を既に増員していた。

国が予算措置の方針を伝えたのが 1 月だったため、18 自治体は採用が間に合わなかったことを今年度の増員見送りの理由に挙げた。「業務量の増加がない」「人員配置には額が足りない」との意見もあった。

厚生労働省は新たな退院後支援が円滑に進むよう、改正法施行を当初予定の来年 4 月から先延ばしするほか、交付税の更なる加算も政府内で要求する方針だ。【熊谷豪、桐野耕一】

【ことば】措置入院

精神疾患のため自分や他人を傷つける恐れのある人を、警察などの通報を受けた都道府県や政令市が強制的に入院させる制度。厚生労働省によると、2014 年度の届け出は 6861 件で増加傾向にある一方、平均入院日数は 13 年度が 87.5 日で短縮しつつある。退院後の支援強化を柱とした精神保健福祉法改正案は今年の通常国会で参院を通過し、秋の臨時国会で衆院が審議する。

殺傷事件 1 年 障害者バンドが悲しみ乗り越える歌披露

NHK ニュース 2017 年 7 月 23 日

相模原市の障害者施設で入所者 19 人が殺害された事件から 1 年になるのを前に、障害

者が中心メンバーのバンドが事件の悲しみを乗り越えるために作った歌を22日夜、都内で披露し、観客とともに歌いました。

歌を披露した「サルサガムテープ」は、障害者が中心メンバーになっている総勢およそ20人のロックバンドで、20年余り前から神奈川県を拠点に活動しています。

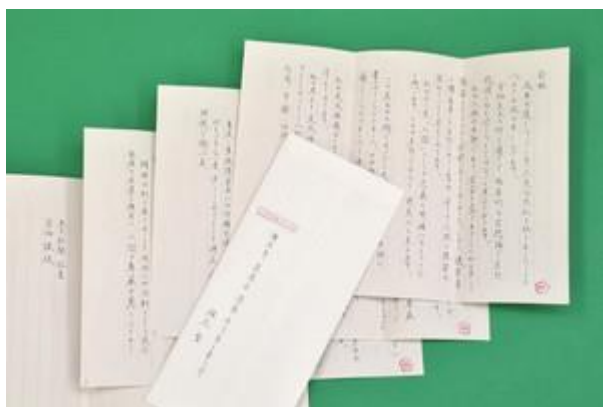
去年7月、相模原市の障害者施設で入所者19人が殺害された事件の後、犠牲者を追悼するライブ活動を続けていて、今年26日で1年になるのを前に悲しみを乗り越えるために作った歌「ワンダフル世界」を東京都内のライブハウスで披露しました。

歌は生きることのすばらしさを訴えていて、観客も声を合わせて「しあわせになるため生まれてきたんだ。生きていることが大好きなのさ」と歌いました。

ボーカルで、脳性まひのY o u G oさんは「事件を思い出して悲しんでいる人たちが、この歌で笑顔になってほしい」と話していました。

バンドではこの歌を障害者およそ300人が登場する映像とともにインターネットの動画サイトで公開していて、全国の人たちに歌ってほしいと呼びかけています。

相模原障害者殺傷1年 識者の思い 生きていてよい、それが人権なんだ



東京新聞 2017年7月23日
相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者十九人が刺殺された事件で、殺人罪などで起訴された植松聖（さとし）被告（27）から三通の手紙が本紙に届いた。「意思疎通がとれない人間を安楽死させるべきだ」と、差別的な考えに変化はない。自らも障害があり、障害者支援に取り組む専門家は「価値があるがなかろうが生きていてよい、それが人権なんだ」と、その考えを否定する。事件から二十一日で一年。「共生」を

進めていけるのか、社会が問われている。（宮畑謙、加藤益丈、加藤豊大）

手紙で植松被告は「私の考える『意思疎通がとれる』とは、正確に自己紹介をすることができる人間」と定義。意思疎通がとれない重度・重複障害者は安楽死の対象にするべきだと、事件当時から差別的な主張を繰り返した。

脳性まひで車いす生活を送る熊谷晋一郎・東京大先端科学技術研究センター准教授（40）は手紙を一読した後、「意思疎通をとれることで『人間』と『非人間』を区別しているが、この論理は破綻している」とゆっくり言葉を絞り出した。「意思疎通とは人と人との間にある関係で、意思疎通がとれないのは被告にも責任がある。一方を抹殺する理由にはなりえない」

熊谷さんは、自分勝手な線引きで人を評価する考え方は植松被告にとどまらないことに心を痛める。

「理想から外れた人を攻撃するのは、ちまたにある排外主義なども同根。社会全体で能力主義がいわれ、自分の価値を証明し続けなければならず、等身大で生きづらい。価値があろうがなかろうが生きていてよい、それが人権なんだと認め合える社会にしないといけない」

手紙で植松被告は「私の考えるおおまかな幸せとは“お金”と“時間”」「重度・重複障害者を育てることが、莫大（ばくだい）なお金と時間を失うことにつながります」とゆがんだ拝金主義もにじませる。

NPO法人「自立生活センター東大和」理事長として障害者を支える活動を続ける海老原宏美さん（40）は「『幸せはお金と時間』という被告の主張が、障害者は不幸だという

考えのベースになっているんでしょう。ここが一番間違っています」と指摘する。

重度障害があり、人工呼吸器を二十四時間使いながら自立生活を送る海老原さん。「世話をされない生きていけない人は世の中にいない、そうなりたくない、と考える人はたくさんいる」。植松被告が手紙に記したのと同じような考え方が、社会に潜んでいることが気がかりだ。

「障害は社会がつくっているという考えが浸透していない。自分が障害者でなくてよかったと多くの人が感じているのであれば、亡くなった十九人は浮かばれない」

◆植松被告が本紙に手紙

植松被告からの手紙は、本紙記者が横浜拘置支所に勾留されている被告に出した手紙への返信として六月七日と十六日、今月二十日の消印で計三回届いた。B5判の便せん十三枚に遺族への謝罪や事件の反省の言葉はなく、襲撃の契機として、トランプ米大統領の演説を聞いたことなどを挙げた。

手紙では重度障害者を「幸せを奪い、不幸をばらまく存在」などと主張。逮捕後の調べには「障害者はいなくなればいい」などと供述していたが、考え方は今も変わっていないことが浮き彫りになった。二回目の手紙では、殺害を思い立ったきっかけに、大統領就任前のトランプ氏の選挙演説と、過激派組織「イスラム国」の活動をニュースで見たことを挙げた。「世界には不幸な人たちがたくさんいる、トランプ大統領は真実を話していると強く思いました」とも記した。なぜそれらの出来事が事件に結びつくのか真意を手紙でただしたが、三回目の手紙で返答は記されていなかった。

事件前に措置入院した当時、ナチスの優生思想を肯定していたとされる点について、手紙では、やまゆり園の職員に障害者差別の考えを話した際に「ヒトラーと同じだ」と指摘されて初めて知った、と説明した。

手紙は論理が飛躍している部分もあるが、文体は丁寧で論旨はほぼ一貫していた。

事件で息子の一矢（かずや）さん（44）が重傷を負った神奈川県座間市の尾野チキ子さん（75）は手紙を読み、涙を流した。「事件前からの差別思想が何も変わっていないとは。障害のある人も人に幸せを与える。当たり前なのがどうして分からないのか」と言葉を振り絞った。

<相模原障害者殺傷事件> 2016年7月26日未明、「津久井やまゆり園」に元職員の植松聖被告（27）が侵入。19人を刺殺、27人に重軽傷を負わせ、殺人容疑などで逮捕された。横浜地検は刑事責任能力があると判断、殺人罪など六つの罪で起訴した。公判日程は決まっていない。

植松被告の公判、被害者は匿名で審理へ 横浜地裁が決定 朝日新聞 2017年7月23日

昨年7月26日、障害者施設「津久井やまゆり園」（相模原市緑区）で19人が殺害され、27人が負傷した事件をめぐる、殺人など六つの罪で起訴された植松聖（さとし）被告（27）の裁判員裁判について、横浜地裁は、氏名や住所などを伏せるよう申し出ている被害者を匿名にして公判を開くと決定した。

刑事訴訟法によると、氏名、住所などの「被害者特定事項」が明らかになることで被害者や遺族らの「名誉または社会生活の平穏が著しく害されるおそれがあると認められる」場合は、裁判所は公開の法廷で氏名などを伏せることができる。被害者側が、検察官を通じて裁判所に申し出る仕組みだ。

関係者によると、今回の事件の被害者側の意向を受け、地裁が氏名などを法廷で明らかにしないで審理することを決め、6月に横浜地検が被害者側に伝えたという。

横浜地裁は「非公開の手続き中なので回答できない」としている。

この事件では、神奈川県警も一部を除いて被害者の氏名や住所を公表していない。横浜地検も、植松被告を起訴した際、被害者名などを明らかにしなかった。

裁判は開始時期のめどが立っておらず、初公判は来年以降になるとみられる。（古田寛也）

相模原殺傷1年 措置入院患者の支援進まず 増員5自治体

毎日新聞 2017年7月22日

昨年7月に起きた相模原障害者施設殺傷事件を受け、国が今年度、全国の自治体に精神障害者の社会参画の支援などをする精神保健福祉士200人を増やせる予算措置をしたにもかかわらず、実際の増員は非常勤を含め1県4政令市の計23人とどまることが、毎日新聞の調査で分かった。国会審議中の精神保健福祉法改正案が施行されれば、自治体は措置入院患者への支援を強化しなければならないが、人員不足のままでは入院長期化など患者に不利益が生じる懸念もある。

殺人罪などで起訴された植松聖被告(27)は、事件前の昨年2～3月に精神疾患と診断され措置入院していた。だが、退院後は通院をやめ、相模原市の支援対象からも外れていたことが事件後に問題視された。

そこで国は、全措置入院患者に対し、関係機関が連携して退院後の支援計画を作る方針を決め、改正法案を提出。施行前に人員態勢を整えておく必要があるため、常勤専門職200人分の人件費に当たる10億円を地方交付税に上乗せして自治体に増員を促した。

しかし毎日新聞が6～7月、47都道府県と20政令市に書面でアンケートしたところ、増員したのは、年度内予定や非常勤を含め岐阜県(6人)▽千葉市(1人)▽横浜市(5人)▽川崎市(2人)▽神戸市(9人)――の5自治体のみだった。

愛知県、北九州市など26自治体は「来年度に増員予定」、大阪府、札幌市など13自治体は「増員予定はない」と回答。「必要人員がまだ分からない」などの理由で明言しなかった自治体も23あった。また、兵庫県は2016年度に8人、徳島県も1人を既に増員していた。

国が予算措置の方針を伝えたのが1月だったため、18自治体は採用が間に合わなかったことを今年度の増員見送りの理由に挙げた。「業務量の増加がない」「人員配置には額が足りない」との意見もあった。

厚生労働省は新たな退院後支援が円滑に進むよう、改正法施行を当初予定の来年4月から先延ばしするほか、交付税の更なる加算も政府内で要求する方針だ。【熊谷豪、桐野耕一】

【ことば】措置入院

精神疾患のため自分や他人を傷つける恐れのある人を、警察などの通報を受けた都道府県や政令市が強制的に入院させる制度。厚生労働省によると、2014年度の届け出は6861件で増加傾向にある一方、平均入院日数は13年度が87.5日で短縮しつつある。退院後の支援強化を柱とした精神保健福祉法改正案は今年の通常国会で参院を通過し、秋の臨時国会で衆院が審議する。

障害者の妹持つ西宮の男性 丹波で支援事務所開設

神戸新聞 2017年7月22日

メガデルガーデンをオープンした峰松さん(左)とスタッフ＝丹波市柏原町田路



農業を通じて就労機会を提供する障害者支援事業所「メガデルガーデン」が兵庫県丹波市柏原町田路にオープンした。障害のある2人の妹と育った峰松眞さん(52)＝西宮市＝が祖父の代から受け継ぐ約25アールの農地を生かして6月に開設。利用者は種まきや土作り、草引きなどに精を出し、峰松さんは「農業と福祉をうまくコラボレーションさせて、自然の中で働く素晴らしさを体感してほしい」と話す。

一般企業での就労が困難な人を対象とした就労継続支援B型事業。

峰松さんは高校卒業後、貿易会社や飲食店などの経営を経て福祉業界へ。介護会社の経営者を務める中、妹の存在がいつも頭の中にあった。「障害があると外に出る機会が減りがち。室内での事業所は一般的だが、お日さまの下で野菜を育てることにきっと意味がある」と力説する。

農業経験はほとんどなく、試行錯誤の日々だ。近所の農家からアドバイスを受けたり、横浜市にある同様の事業所を視察したりと、勉強に励んでいる。

畑では、有機農法で季節ごとの野菜を20種類ほど栽培する。現在はナスやトマトなどの夏野菜を育て、峰松さんの自宅近くにある西宮市甲陽園西山町の実家に販売コーナーを設けて毎週日曜に直売。毎回完売するほどの人気だという。

今後、野菜のブランド化やドレッシングなどの加工品も目指しており、峰松さんは「利用者が良質な野菜を育てているという自負を抱き、働きがいを感じるような事業所を目指したい」と意気込む。利用者募集中。(大田将之)

県リハビリテーション病院・こども支援センター完成 整備事業完了祝い式典

中日新聞 2017年7月23日 富山
外来駐車場や屋根付き玄関が完成し、全ての整備事業が完了した県リハビリテーション病院・こども支援センター＝富山市下飯野で

高度なリハビリ医療や心身障害児の支援強化を目指す県リハビリテーション病院・こども支援センター（富山市下飯野）で、屋根付きの正面玄関や外来駐車場（約二百台）が完成した。これで全ての整備事業が終わり、二十二日に記念式典が開かれた。

昨年一月に開業したリハビリ病院（百五十床）は、脳卒中患者らの早期回復と在宅復帰に取り組む。支援センターは脳性まひを患う子どもの受け入れ、障害児の生活やコミュニケーション訓練を行い、開業後も県障害者相談センターや就労支援事業所などを置き、機能の充実を進めてきた。全体の事業費は九十六億円。

式典には、障害者団体や医療関係者ら約百四十人が出席。石井隆一知事が「リハビリ病院では患者の回復率と在宅復帰率が高まっており、支援センターでも多様な障害への対応を強化している」と成果を語った。

昨年のリオデジャネイロパラリンピックのボッチャ団体で銀メダルに輝いた藤井友里子さん（44）＝富山市＝も、記念オブジェの除幕やくす玉割りに加わり「すごく明るい雰囲気施設の。障害や病気のある人が目標を持って楽しく生きるための手助けになると思う」と期待。県生涯福祉課の担当者は「今後も必要に応じて施設の改修や拡充を図りたい」と話していた。

同課によると、昨年度の施設利用者の延べ人数はリハビリ病院が十二万人、支援センターが一万九千六百人だった。（杉原雄介）



人は見た目が何%？ 外見重視の風潮とどう向き合うか 朝日新聞 2017年7月23日

粕谷幸司さん

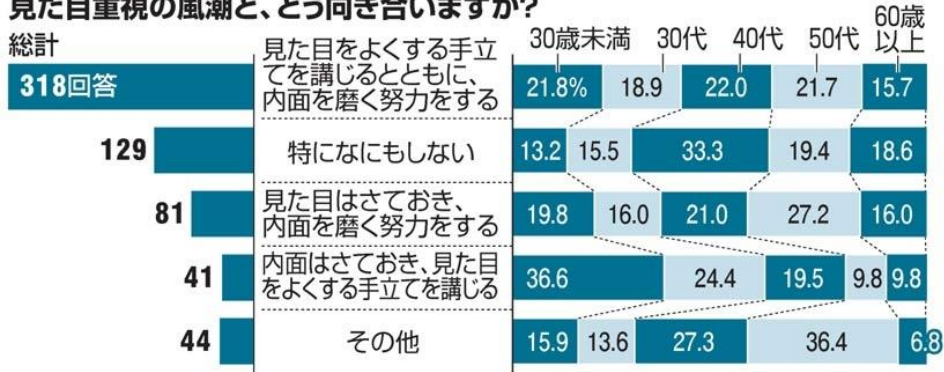
見た目重視の風潮について、変えられない・変える必要がないというアンケートの回答が4分の1ほどありました。変えるにはメディアが変わらなくては、という回答は4割近くになりました。この風潮と、どう向き合ったらいいのでしょうか。子どものころから、自分の見た目についてとことん考えてきたという男性に尋ねました。
■第一印象で決めつけない アルビノ・エンターテイナー 粕谷幸司さん



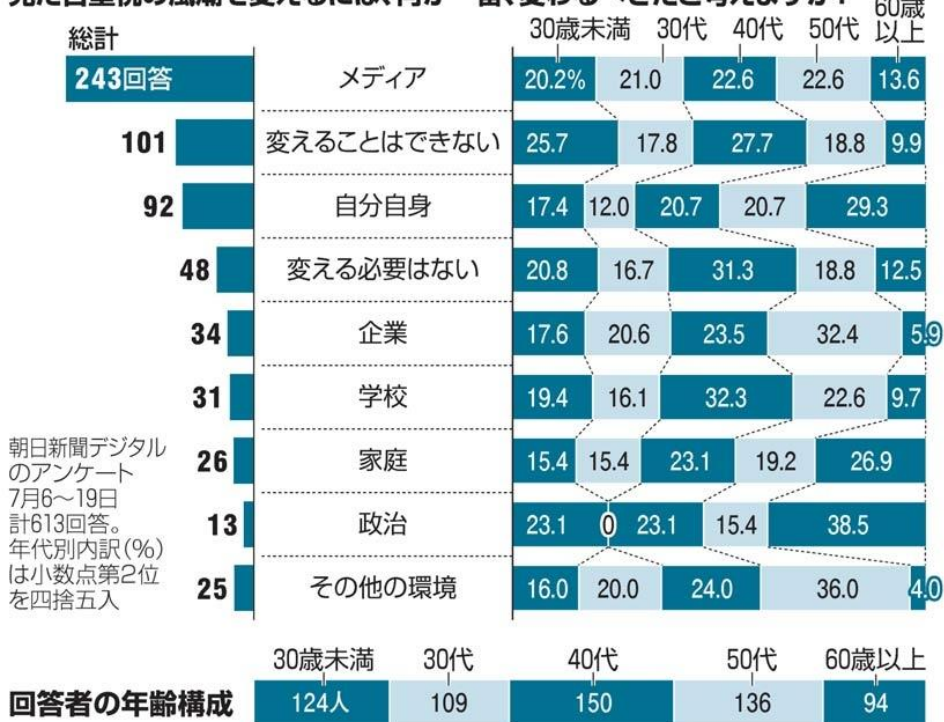
肌や体毛が白いアルビノに生まれ、アルビノ・エンターテイナーとして活動する粕谷幸司さん（33）と、アンケート「見た目重視の風潮」について話しました。

見た目重視の風潮は良くも悪くもあると思いますよ。外見で他人を傷つける風潮は嫌です。でも、「あの綺麗な人、好き！」って感情はすてきです。見た目がまったく影響しない社会なんて、ちっともおもしろくないですよ。みんな仮面をかぶって暮らすんですかね？電化製品は単一色で、形も同じになっちゃいますよ。

見た目重視の風潮と、どう向き合いますか？



見た目重視の風潮を変えるには、何が一番、変わるべきだと考えますか？



朝日新聞デジタルのフォーラムアンケート

僕は外国人と間違えられて「ハロー」って声をかけられることがあります。白いから。「可哀想」って勝手に同情されることも。でも、付き合いが長くなると、相手は僕の白さを意識しなくなるようです。

僕も見た目の第一印象から「こんな人かな」って推測します。でも、「こういう人だ」って決めつけないよう

気をつけます。しゃべり方、声色、しぐさ、におい、話す内容と、様々な情報が入ってきて、本当の付き合いは、それからです。

アンケートに「不細工のせいで異性と交際できない」という声がありましたが、見た目のせいにするのはやめましょうよ。僕も新卒の就職活動でなかなか内定がもらえず、採用担当者に「君の見た目が……」と言われたこともあります。でも、「アルビノのせいで」とは考えませんでした。だってそのせいにしたら、前に進めなくなりますから。表情や服装、知識、トークの技術なんかは、努力すれば磨けます。

アルビノの自分を肯定できるのは、「白くてキレイ」と言って育ててくれた母のおかげです。僕は子どものころから、「人と違う自分って何者だろう」と、とことん考えてきました。

アルビノを売りにエンターテイナー活動することが、僕なりの答えです。

初対面の人に、「こういう見た目ですけど、アルビノって知っています？」って始めることも多いです。説明すれば理解してくれる人は必ずいます。たとえ社会が変わらなくても、目の前にいる人と自分との関係は変えていけると、僕は信じています。(聞き手・岩井建樹)

■悩みバネに 高く飛ぼう

見た目重視の風潮と、どう向き合うのか。様々な意見が寄せられました。若い人たちの意見を紹介します。

●「目を一重から二重にしました。『目の細さが糸のよう』『腫れぼったい』など言われてきて、重たい一重まぶたがずっとコンプレックスでした。自分の身体にメスを入れる勇気がなかなか出ずにいましたが、去年の夏思い切って二重にしました。すると、見る世界が変わりました。今まで自信が持てずにいたのに、勇気が持てた気がします。昔の私も好きでしたが、今の自分はまだ好きです。残念ながら、見た目はかなり大切だと思います。自分の人生なのだから、整形によって自信を持って生活できるようになるのなら、少しぐらい整形してもいいのではないかと私は思います。私は整形してよかったと思っています」(大阪府・20代女性)

●「中身が大事とわかっているけど、第一印象で話す相手を決めてしまうことが多いし、相手の中身を知ろうとする前段階で、見た目が良くないとそもそもその人について知ろうと思わないこともある。そんな自分が大嫌い。だから最近は、見た目がちょっとイマイチだなという人とでも頑張ってコミュニケーションを取ろうと努力しています。すると意外な話が聞けて楽しいです」(千葉県・10代女性)

●「見た目を理由に人から嫌われたり、疎外されたりという経験を幼い頃より繰り返している私は『見た目がよくない＝だめな自分』としての自我が形成されて、何をするにも自信がもてない。見た目のせいにするとか、結局中身が見た目に出るとかっていう意見をよく耳にするし、それも一理あるとは思いますが、そういわれるとものすごくつらくなってしまいます。もちろん、見た目や中身を少しでも磨く努力はしたい。でも、努力だけではどうにもならない『生まれつきの格差』が存在していることも確かだと思う。一個人の力では、見た目重視の世の中を変えることは難しい。でも、それが変わったらどれだけ楽になるだろうと、ずっと思ってる」(京都府・20代女性)

●「見た目のことですごく悩んでいるが、だからこそ『美しい』という基準がなくなったらもっと絶望すると思う(その価値観があるからこそこんなに悩んでいるのに、その悩みが無駄になる)。うまい落とし所がわからない。『人は見た目じゃない』じゃなく、『見た目が問題なほど醜くない』と言われないと安心できないまでに侵されている。自分が他人に100%受け入れられないことを外見のせいだと思ったり、内面のせいだと思ったり、とにかく自分を責めてしまう」(東京都・20代女性)

●「生まれた地域にハンセン病施設、障害者向け病院、支援学校、英語圏の人向け学校があったので、いろんな国から来た違う肌の色や骨格、思想や服装の人たちを見て育ちました。幼稚園の帰りには同じ曜日にスーパーで会うダウン症のお姉さんがいて他にも同じ制服を着ている人がいる中すぐにわかるのを『他と違うけど誰が誰だかわかりやすくいいな』と感じました。小学生で海外生活を経験し、みんな違うのはどこも同じだと確認し、違う人は違う扱いを受けていることに気づきそれが差別だと知りました。誰もが一度マイノリティーの経験をするだけで見方が変わると思います。多様性とは『自分は“皆が違う世界”の一人』であると知ることだと思います」(東京都・20代女性)

●「私自身容姿が醜いことをかなりいじられました。劣等感のおかげで『世の中の人には誰も彼も見た目を重要視する。それ以外の部分を伸ばししないと自分は落後者になってしまう』という強い意思から勉学に励みいわゆる一流大学に進学することができました。一流大学だからなのか、皆が成長したのかかわからないですが、人の容貌(ようぼう)に罵詈雑言(ばりぞうごん)を浴びせるような人はめっきり減り、人間不信から脱却もできました。いま悩んでいる方に伝えたいのは、容貌の良しあしで人を馬鹿にするようなやつには負けずに、

自分の長所を伸ばさせることに注力してください。そういったバネがあるあなたは周りよりもより高く飛べるのですから」(岡山県・20代男性)

●「私はJKと呼ばれる立場ですが、おしゃれや化粧品に全く興味がありません。化粧品は必要といいますが、私にはそれが自分の顔にありもしない絵を描いて、外側を飾るだけのことに思えてなりません。自分の顔に自信などない私ですが、将来、化粧品はしたくないと強く思います。化粧品をしたくてするのは分かりますが、したくない人も化粧品をしないと迷惑——そんな考えを持つ社会に出ていくのは憂鬱(ゆううつ)です」(大分県・10代女性)

■とらわれている メディアも私も

メディアについて書かれた意見の一部です。

●「テレビのお笑い番組等で容姿をネタにしているものがありますが、学校や会社で同じことをするとアウトです。いじめです。でも、テレビで容姿のことを言われた芸人さんが笑って受け流し、いじる方もいじられる方も『おいしい』と思っているのを見てみると、学校や会社でいじられた(いじめられた)人も笑って済まさないといけないう風潮になってしまふ。そう思うようになってからは、テレビを見ているのがつらくなりました。そのテレビを笑ってみていると、いじめに加担しているような気になります。何も考えずに笑っている人たちは、どう考えているのでしょうか?」(京都府・50代女性)

●「スポーツの報道はその結果を中心にされるべきだろう。でも、実際には違う。容姿の良い選手の方が圧倒的に注目されている。美人アスリート、美しすぎるアスリート、ともてはやされる。順位が下の『美人アスリートペア』はインタビュー映像まで紹介したのに、上位のペアは結果だけの紹介だった。人は外見ではない。内面を磨けと言う。その通りだ。けれど、スポーツの世界にしてこうだ。一般の社会が違うはずがないではないか。一方で、そうやって外見ばかりを注目される側も好ましいことばかりではないだろう。本人の努力やその結果をきちんと見てもらえていないわけだから」(東京都・50代女性)

●「美魔女、男性でも見た目ケアなどなど、メディアが見た目重視の風潮をあおっているように感じる。是正されるべきだ」(広島県・20代女性)

●「見た目重視の風潮は何をどうしても変わらないでしょう。例えばアイドルグループ『嵐』の5人の見た目は格好いい。凡人の私が太刀打ちなんてできっこない。そりゃ世の中の女性にモテるのは、自分ではなく5人ですよ。じゃあどうするか。『面白く思われるにはどうしたらいいか』などと、イケメンとは違う土俵に立とうと努力します。そうすれば、イケメンよりは数少ないだろうけど、自分のことを理解してくれる方が現れるかもしれないから。芸能界で『三枚目』を売りにする俳優さんや一部のお笑い芸人の方には、私と同じような考えを持っている方も多いのでは」(高知県・30代男性)

「見た目重視の風潮を変えるには」と尋ねたところ、15%の方が自分自身が変わらねば、と答えました。一方、メディアが変わるべきだ、との声は4割近くにも。右顔の筋肉が未発達のまま生まれた長男(7)と歩む父親として、私は「人は見た目が何%?」をみなさんと一緒に考えたいと思いました。寄せられた声を読み、そんな私自身が親として、メディアの当事者として、強く問われているのだと気づかされました。これからも、「見た目と社会」について考え続けます。(岩井建樹)

◆ほかに、高橋美佐子、船崎桜、守真弓が担当しました。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

